



公益財団法人 国際文化会館
International House of Japan

日印対話プログラム2026 実施報告 (2026年3月16日～18日)

概要

国際文化会館(I-House)は、2026年3月16日から18日にかけて、ニューデリーおよびアーメダバードにおいて「日印対話プログラム2026」を実施した。本プログラムは、これまでインドの有識者を日本に招へいする形で実施されてきたが、今回は初めて日本側専門家をインドに派遣し、双方向交流を推進する新たな段階となった。

今回の日本側専門家として、建築家の妹島和世氏を迎えた。世界的に活躍する建築家である同氏の参加により、日本が国際的に強いプレゼンスを持つ建築分野を通じて、日本とインドの関係深化と、持続可能性、防災、環境設計といった共通課題についての議論を促進することを目的とした。

本プログラムは、Shahani Associates、インディア・インターナショナル・センター(IIC)、CEPT大学との共催、国際交流基金の支援のもと実施された。また、I-Houseアートデザイン部門ディレクターの長谷川祐子氏による特別セッションは、国際交流基金ニューデリー日本文化センターとの共催により開催された。



Shahani Associates Limitedは、2005年に設立された東京を拠点とする人材アドバイザーおよびエグゼクティブ・サーチ企業である。さまざまな業界におけるミドルからシニアレベルの専門人材および経営幹部の発掘・紹介を中心に、採用および人事アドバイザーサービスを提供している。国境を越えた交流とリーダーシップ育成への取り組みの一環として、同社は2017年以降、日印対話プログラムの共催者として参画し、日本とインドのリーダーや専門家の対話と協力を促進する活動を支援している。

インド・インターナショナル・センター(IIC)は、国際理解と対話の促進を目的として1962年にニューデリーに設立された、インドを代表する非政府の文化・知的交流機関である。同センターは国際文化会館の活動にも着想を得て設立され、講演会、セミナー、文化プログラム等を通じて政策関係者、研究者、文化人が意見交換を行うフォーラムとして機能している。IICは日本および国際文化会館と長年にわたる関係を有しており、共同事業の実施や、2022年に締結された戦略的パートナーシップを通じて日印関係の強化に取り組んでいる。

CEPT大学はインド・アーメダバードに拠点を置く、建築、都市計画、デザイン分野における教育・研究をリードする大学である。1962年に設立され、建築環境に関わる複数の分野を横断的に統合するとともに、スタジオベースの教育手法と地域性・持続可能性を重視したデザイン教育で知られている。同大学は国際的な学術交流を積極的に推進しており、建築・デザイン分野における異文化間対話を促進し、日印協力に関連する取り組みにも貢献している。

国際交流基金は、日本の総合的な国際文化交流を担う中核機関であり、文化芸術交流、日本語教育、知的対話を通じて相互理解の促進を図っている。世界各地に展開するネットワークの中で、国際交流基金ニューデリー日本文化センターは、日本とインドの文化・学術交流を推進する上で重要な役割を果たしている。特に、日印外交関係樹立60周年を記念して2012年に日印対話プログラムが開始され、各分野で活躍するインドの有識者を日本に招へいし、講演および日本側関係者との対話を通じて人的交流の強化が図られてきた。同プログラムは国際文化会館と国際交流基金の共催により実施され、2012年から2016年の間に4名のフェローが招へいされた。

日印対話プログラムの背景

日印対話プログラムは、2012年の日印国交樹立60周年を記念して開始された。本プログラムは、社会課題に対し新たな価値や革新的な提案を行うインドの有識者を日本に招へいし、人と人とのつながりを強化することを目的としている。

プログラム開始以来、各分野の知識人や実務家、政策関係者を日本に招き、公開講演や対話を通じて日本側関係者との交流を促進してきた。これにより、両国の相互理解の深化と有識者ネットワークの構築に寄与してきた。

2026年には、日本の専門家をインドに派遣する新たな取り組みが加わり、交流の双方向性が一層強化された。妹島和世氏の訪印は、本プログラムにおける新たな節目となった。

3月17日 妹島和世氏講演(India International Centre、ニューデリー)

妹島和世氏は「Architecture & the Environment」と題し、約40年にわたる建築実践を振り返る講演を行った。建築家、学生、一般参加者など約150名が参加した。

講演では、初期の住宅作品から始まり、開放性や内外空間の関係性に関する考え方が紹介された。テラスや柔軟なレイアウトを通じ、コミュニティとプライバシーの両立を図る設計手法について妹島氏は説明した。

さらに、氏は美術館や大学などの大規模プロジェクトにおいては、透明性や景観との統合を重視した設計思想について展開し、加えて、気候条件に応じた設計や「中間領域」の重要性についても言及した。



Jaikumar Shahani氏 (Shahani Associates)による開会挨拶



建築家・元計画建築大学学部長 KT Ravindran氏による冒頭挨拶



妹島和世氏 (SANAA) によるIICでの講演



講演終了後のレセプション



レセプションでの交流の様子

3月18日 妹島和世氏講演(CEPT University、アーメダバード)

CEPT大学において、妹島氏による2回目の講演が実施され、学生や教員、専門家など約800名が参加した。

講演で妹島氏は、人・建築・環境の関係をつなぐ共有空間としての建築の役割を強調した。住宅から文化施設に至るまでの作品を通じて、連続性や透明性、自然光の活用などの設計思想も紹介した。

また、「中間領域」が社会的交流を促進する要素として改めて言及され、建築は人々の活動によって発展する枠組みを提供すべきであるとの妹島氏の考えが示された。続く活発な質疑応答では、参加者が妹島氏と直接意見を交わす貴重な機会となり、非階層的な空間や利用者主体の体験に関する回答を通じて、建築を人々が共有しながら関係性を育み、活動を通じて発展していく環境として捉える同氏の考えが一層印象づけられる形で締めくくられた。



妹島和世氏(SANAA)のCEPT大学における講演



妹島和世氏、Sameep Padora教授、長谷川祐子氏によるディスカッション



多数の参加者が集まった妹島氏講演



別会場でのライブストリーム実施

3月16日 長谷川祐子氏特別セッション(ニューデリー)

ニューデリーのNIV Art Centreにおいて、「Crafting the Future: Japanese Art Between Tradition and Technology」と題した長谷川祐子氏による特別講演を開催した。アーティスト、キュレーター、文化関係者など約30～40名が参加した。

講演では、日本の現代アーティストが伝統工芸をどのように再解釈し、技術革新と融合させているかについて紹介があり、デジタルモデリング、レスポンス素材、ハイブリッド材料などの事例を通じ、伝統的技法と現代技術の融合も示された。

また、日本の工芸にみられるアニミズム的感性と、自然・精神性・技術を結びつけるインドの芸術との共通点にも言及があった。さらに、AIやデジタル技術による創造領域の拡張の可能性と日印間の文化交流の新たな展望が共有された。



(左) 佐藤幸治氏(国際交流基金ニューデリー事務所所長)による開会挨拶
(右) 長谷川祐子氏(国際文化会館アートデザインディレクター)による講演



長谷川祐子氏、Rajnish Chhanesh氏（現代アーティスト）、
Ruchika Wason Singh氏（司会／ビジュアルアーティスト）によるディスカッション



講演後の参加者との懇談

総括

本プログラムは、建築およびアートを通じて日本とインドの知的・文化的交流を強化する上で、重要な成果を挙げたと言える。妹島和世氏および長谷川祐子氏による講演には、専門家、学生、一般参加者など幅広い層から高い関心が寄せられ、持続可能性、伝統、技術、現代デザインといったテーマについて活発な対話が促進された。少人数による専門的な議論から大学における大規模講演に至るまで、多様な形式での高い参加が得られ、異なる背景の方々における日本の建築に対する関心の広がりや交流の深まりを創出することができた。

また、本プログラムは双方向的な交流の意義を示すとともに、創造的かつ学際的なアプローチを通じて、環境や持続可能性など両国が共通して直面する地球規模課題に取り組むための協力の可能性を明らかにした。今後の日印間における継続的な連携および新たな協働の機会に向けた基盤を築くものとなった。



妹島氏に作品の批評をいただいているCEPT大学の学生

今後の展望

本プログラムにおける日本側専門家による初の訪印の成果を踏まえ、日印対話プログラムは、今後も継続的な二国間交流の基盤としての役割を拡充していくことが期待される。今後のプログラムでは、建築、都市計画、芸術、技術、公共政策など多様な分野の専門家の交流を拡大しつつ、両国の機関および実務家間の連携の深化を図ることが望まれる。

また、フォローアップの対話、共同ワークショップ、共同研究などの機会を通じて、長期的なパートナーシップの形成を促進していくことが重要である。特に、持続可能な都市開発、環境レジリエンス、文化遺産、学際的デザインといった分野は、日印協力の有望な領域として今後の展開が必要と考える。

相互訪問と継続的な交流を通じて、社会課題に取り組む知的リーダーのネットワークの形成が見込まれる。こうした取り組みにより、本プログラムは人的交流の一層の強化を図るとともに、日本とインドの間における未来志向の協働の発展に寄与することが期待される。